
年下の彼氏

橘葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

年下の彼氏

【Nコード】

N3648G

【作者名】

橘葵

【あらすじ】

地味で目立たない高校3年生の少女と、端正な顔立ちで人気がある高校1年生の少年の恋物語。ある日、瑞希みずきは合コンで会った相葉という少年に散々バカにされる。もう会いたくないと瑞希は落ちこむが、相葉は……………？基本的に甘い話です。

第1話 最低の合コン

合コン。

そう呼ばれるものに参加したのは、高木瑞希みずきにとって初めての経験だった。

18歳。高校3年生の春。

「いいよ…私なんて行っても盛り上がるわけじゃないし」

「だめ！そんなんだから前の彼氏にふられちゃうんだよ？」

友達の小春こはる。とても美人でクラスの人気者だった。

対する瑞希はとても地味だ。背もそれほど高くなく、小春のようにかわいくない。内気で、目立たない。小学校のときから「いるかないかわからない存在」としてよく言われたものだった。

今日の合コンも、小春に無理やり連れてこられたものだった。「前の恋を忘れるためには、新しい恋が1番！」って言われて。

午後5時半。約束の時間よりもだいぶ遅れて瑞希たちはカフェに到着した。

それからがまた大変だ。彼女たちは髪の毛やメイクをチェックし、ようやく中に入ったときには40分を回っていた。

「遅くなつてごめんなさい」

瑞希以外の3人の女子が高い声を出す。

すでに席を取っていた男性陣4人はそれぞれに笑顔を貼り付けて出迎えてくれた。

その視線が突き刺さる。たぶん小春たち3人の女子を綺麗、瑞希を地味だと分類しているのだろう。

ふと、1つの視線に気づき、瑞希は顔を上げる。

それは1番左にいる少年だった。端正な顔立ちをしている。かわいくて綺麗な表情が瑞希をじっと見ていたが、やがて不機嫌そうに歪められて、ぷいっとあさつての方向を向いてしまった。どうせ自分を見て地味だとも思ったんだ。そんなことはわかりきったことだ。

「それじゃ、まずは自己紹介からしよっか！」
右から2番目に座る男が段取りを仕切る。その声にみんなが盛り上がった。

うう…苦手だなあ。こういうの。
場違いな身を小さくさせて、瑞希は早く時が過ぎるのを待っていた。

約1時間後、恐れていたことの1つ、知らない人間との会話が起こった。

相手は柔道部だと言う体格のいい男子だが、見た目に反して妙に馴れ馴れしかった。

その頃には席替えも行われていて、瑞希の隣には柔道部の田口が座っていて、彼の向かい側には、さっき目が合ってそらされた少年がいた。

名前を相葉はいろというらしい端正なその少年は、女子からとても人気だった。

「高木さん、瑞希っていうんだ。名前で呼んでもいい？」
田口がにっこりと笑って言う。

「は、はい」

緊張しながら答える。

「そんなに緊張しなくてもいいって。なあ、相葉？こういうのもなんか初々しいな」

相槌を求めて田口が相葉を見る。相葉は少しだけ笑ってこっちを見た。

「初々しいってーか？古臭くね？逆に狙ってんの？」

なに…？なんでこんなこと言うの？

「べ、別に狙ってなんか」

思わず抗議するが、相葉の冷やかな視線が突き刺さった。

「田口もこういう暗そうなのはやめといたほうがいいと思うよ？」

「おっおい…相葉」

慌てて田口がその場を取り繕おうとするが、瑞希は何も聞いていなかった。

なんで初対面の人にこんなこと言われなきゃいけないのよ……
悔しくて涙が出そうになった。

前の彼氏のと きもそうだった。

小春に紹介されて、つきあってみたけれど、影で「つまんない」「暗い」って言われていたことぐらい知ってる。

ふられたのもすぐのことだった。

わかってる。言われなくてもわかってるから。

もう恋なんてしたくない。帰りたい 帰ろう。

ちらりと店の時計を見て、立ち上がろうとしたときだ。

「でもさ、俺も合コン初めてじゃないけど、あんたみたいな初め
てだ」

相葉が屈託のない笑みを浮かべて言う。瑞希はびくつとした。

「来るとこ間違えてんじゃないの？」

なんで。なんでこんなこと言われなきゃなんないの……

悔しくて、でも何も言い返せなくて、ただ涙だけが溢れてきて…
こんなやだ。こんな人の前でなんて泣きたくない　！

だけど、限界だった。

瑞希は耐え切れなくてその場を飛び出していった。

第2話 追いかけてきたのは…

カフェを飛び出してから走ることに10分。さすがに疲れてきた瑞^{ずき}希は駅へと続く道をとぼとぼと歩いていった。

逃げ出すような形で逃げてきた。あの後どうなったんだろう。

小春たちには悪いことをしたと思う。だけど、あれ以上あそこになんていたくなかった。

あの相葉^{あいば}とかいう男がいる所なんて……

時刻は午後7時を回っている。

バスで帰ろうと思っていたのに、瑞希はカフェにバッグを忘れてきたことに気づいた。

最低だ。なんてついてない…

瑞希は自分自身の不運にため息をついた。

ふと、相葉のことを思い出した。

端正な顔立ち。一目見ただけで、おそらく多くの女性を見とれさせることができるだろう。それくらいかっこよかった。

だけど、口を開けばその正体がわかる。

瑞希もあんなにはつきりと言われたことがなかった。それくらい、瑞希の精神はズタズタに切り裂かれた。

私が何をしたのよ

思い返しただけで目頭が熱くなる。悔しくて、惨めで、嫌になる。

「もうやだ……」

なんでこんなに地味なんだろう。なんでもっとかわいくなかった

んだろっ。

小春のようにかわいくて、みんなから好かれる人になりたかった。

考えながら歩いていたらせいか、瑞希は眼下の段差に気づかなかつた。

「わっ……」

段差に躓いて転んでしまう。

「いった」

すぐに起き上がることができなかった。膝がじんじんと痛み、転んだ拍子についた手のひらがすれて赤くなっている。

通行人が何人か見ているのがわかった。瑞希はその視線を感じて慌てて立ち上がったが、いきなり立ち上がったためにすぐ傍を歩いていた人にぶつかりそうになってしまった。

男女のカップルのうち、ガラの悪そうな男が露骨に迷惑そうにこっちを見ている。

瑞希は慌てて頭を下げる。

「すみません」

「ちっ…邪魔なんだよ、ブス」

その言葉は今の瑞希にはこたえた。

「ちよっとー聞こえちゃうよー」

「大丈夫だって」

カップルはそのまま歩き去ってしまう。笑い声だけを後に残して。

瑞希はその場で1人深く俯いた。

膝が痛い。風が吹くたびにしみて痛い。

本当に今日はなんて日だったんだろっ。こっぴつ日は早く帰って、お風呂に入っちゃおう。あ、でもお風呂入ったらしみて痛いかな。だけど、家に帰れば誰も自分のことを罵倒する言葉なんて言わない。

家が1番安心する …

そんなことを考えても、涙はとまらなかった。口元を引き締めて堪えるが、どうしても涙がとまらない。どうやってとめるのかわからなかった。

何かを言われた気がした。だけど、瑞希は顔を上げない。そのせいか、近くにいた誰かにぶつかってしまった。

また何か言われる…！

瞬時にそう思った瑞希は慌てて頭を下げて謝る。

だけど、目の前にいたその誰かは何も喋ろうとしない。それどころかその場を退^どこうともしなかった。

ようやく瑞希は顔を上げた。そして、相手を見て驚くことになる。

相葉……？

それは、さっきの合コンで散々自分をバカにした張本人だった。

相葉は決まりの悪そうな表情でそこに立っていた。

第3話 どうしようもなく

なんで相葉がここに……？

瑞希みずきはしばらくぼかんとして目の前に立つ男を見ていたが、やがてさっきのことを思い出してはつとなる。

もうこんな奴と関わり合いたくない。今だっでどうせまた自分をバカにしに来たんだ…

瑞希は無視して立ち去ろうとした。

しかし、180度向きを変えた瑞希は相葉によって腕をつかまれて邪魔されてしまう。

「…離してください」

きつと睨むと、相葉は無表情で何かを押し付けてきた。

それは瑞希のバッグだった。どうやらこれを持って帰れということらしい。

持ってきてくれたことはありがたいが、そのことに対して礼を言うのはしゃくだった。瑞希も無表情でそれをひったくって帰ろうとした……が、

また相葉の腕につかまった。

「なんなんですか!？」

この期に及んで、今度は何をしたいんだろう。合コンでの一件ではまだ足りないのか、相葉は何か言いたそうにしている。

聞きたくなかった。

「私が何したって言うんですか……」

それが瑞希の精一杯だった。

「みんなの前であれだけ言って…なんで……なんで」

最後のほうは支離滅裂だ。言いながら情けなくも涙が出てきた。こんな人の前でなんか泣きたくない。泣きたくないのに……どうせまた泣くななんてうざいとも思われてるのだろう。

涙で滲んだ瞳に映るのは、困ったように顔をしかめる相葉の姿。「ごめん……どうすればいいのかわからなくて」
相葉の声はひどく小さくてよく聞こえなかった。

と、そのときだ。瑞希は誰かによって体を引っ張られる。

「っ!?!?」

驚いて振り返ると、そこにいたのは……

「田口君……?」

合コンで会った柔道部の男子、田口が息を荒くしてそこに立っていた。それも険しい表情で相葉を睨んでいる。

「何してんだよ」

たぶんまた瑞希をバカにしていたと勘違いしているのだろう。

「別に……何も?」

けろりとした様子で相葉は手をズボンのポケットに突っ込む。瑞希はそのときあるものを見た。

「行こ、瑞希さん。家まで送るよ」

「あ……」

腕を引っ張られて、瑞希は強制的にその場を離れることになった。

だけど、あのときに見たものが瑞希は気になっていた。

田口が来る直前に差し出されたもの。それはバンソーコーだった。
た。

田口に話しかけられた瞬間、ズボンの中に隠してしまったが、瑞

希は確かに見たのだ。

まさか……だよな。

怪我をした自分のために差し出したのかと思ったが、そんな人ではないと瑞希はすぐに否定した。

「ごめんね？相葉も普段はあんなこと言う奴じゃないんだけど……学校でむしゃくしゃしたことでもあったのかも」

田口が必死にフォローしているのがわかる。あんな奴のフォローなんてしなくてもいいのにと思いながら瑞希は相槌を打つ。

いつのまにか涙はとまっっていることに気づいた。また考えると泣きそうだったのであえて考えないようにする。

バッグが戻ったので、瑞希は駅からバスで帰ることにした。

その間、田口がずっと傍にいてくれた。ありがたかったけど、正直どう会話していいのかわからなかった。

しばらくしてバスが来ると、瑞希はほっとして立ち上がる。

「ありがとう……じゃあ」

「うん、また」

田口がにっこりと笑顔で送り出してくれる。

いい人だな、田口君は。

率直な感想を抱いてバスに乗り込む。

座席に着いてから、下を見下ろす。

まだいるであろう田口の姿を捜したのだが、すぐには見つからなかった。

「あ……」

ようやく見つけた田口はもうバス停から離れた所を歩いていた。

その後姿を見て、瑞希はどろりとしよつもなく寂しくなっていました。

第4話 信じられない

瑞希みずきが合コンでいなくなった後、すぐに追いかけていったのは相葉だった。

…ということを、合コンの翌日、同じクラスの小春にそう聞かされた。

小春だけは心配してくれて、何度も電話してくれた。2次会にも参加しなかったらしい。

「ごめんね…まさかあんなことになるなんて」

「ううん。小春のせいじゃないよ」

あんなこと…相葉に散々バカにされたことだ。今考えても胸が痛くなる。

それから、田口。何度かメールが届くが、思うところがあって返信をしていない。

「じゃあ、先に帰るね」

小春はあの合コンで知り合った男子とこれから遊ぶ約束しているらしい。

今日日直だった瑞希は一緒に帰ることなく、笑って見送った。

だけど、日直の仕事を終えて帰宅しようとしたときだ。校門の前に人だかりができていることに気づいた。

そのほとんどは女子。中に1人の男子が交じっているような気がする。

「あれ…？」

中心にいた男子と目が合ったとき、瑞希は思わず声を出してしまった。

「あ、やつほ」

相手は笑顔で迎える。

しかし、瑞希は反対にあからさまにげっという顔をしてしまった。
……そこにいたのは、相葉だったのだ。

「こないだこの高校だつて言つてたから来ちゃつた。ちよつと話があるんだけど」

そう言つと、周囲にいた女子たちを置いて、相葉はこつちに歩いてくる。

なに？今度は何を言いに来たの……？またバカにされるのはごめんだ。

「はっ、話なんて……」

ないと言いかけたのに、問答無用でどこかに連れて行かれる。

「ちよつとだけだから」

強引に連れて行くのだから、よっぽど何かあると思つたのだが、相葉に連れて行かれたのは高校の近所にある公園だった。

戸惑う瑞希を連れて、相葉はベンチに腰掛ける。瑞希も座るように促され、仕方なくベンチの隅に座つた。

しばらく沈黙が続いた。

なんでだろう……緊張する。昨日は散々言われたのに、自分も現金な人間だとつくづく嫌になる。

「あれからいろいろ考えたんだ」

あれから……？昨日からと言いたいのだろうか。

「俺ね、こう見えても自分から告つたこともないし、それはそれは綺麗なカノジヨがいたときもあつた」

自慢？だから何？

「とりあえず女の子には優しくしとけてカンジで……だけど、昨日は違つた。なんでか知らないけど、最初に瑞希を見たら、こう

「
そう言って相葉はまっすぐな瞳で瑞希を見てくる。」

「まわりくどいのは無理だ。単刀直入に言う！俺とつきあってください」

瑞希は何かを考える前に、あっさりと首を振ってしまった。

それを返答ととったのか、相葉はとても絶望的な表情をした後、やがてしょんぼりとうなだれてしまった。

なに？なんで？意味がわからない。

からかうにしても、わざわざ瑞希の高校まで来る理由がわからない。何かの罰ゲームでもやらされているのかもしれない。

「き、昨日あれだけ言われたのに、そんなの信じられないよ」

率直な感想を述べると、唐突に相葉は顔を上げる。

「昨日は、俺が一目惚れなんてありえないって思ってたし、どう接すればいいのかわかんなくてあんな態度とった……ごめん」

「もういいけど……」

やばい。なんか変だ。

瑞希はその内心を悟られないようにするためにもう帰ろうと立ち上がったが、腕をつかまれてしまう。

「ひゃっ……！」

「明日ヒマ？」

「……暇だけ……」

相葉が嬉しそうに笑った。

「よっしゃ。じゃあ、明日の昼12時に駅前マックに集合！デートしよ」

勝手なデートの約束に、瑞希は戸惑ってしまった。

目の前の男が自分を騙しているのか、それとも本気でデートに誘

っているのかわからない。

「行かない……」

それが瑞希の出した結論だった。17年間の経験で、こうしたほうがいいと悟っていたのだ。

「待ってる。ヒマなんだろう？」

「行かないから」

「来るまで待ってる」

「行かないってば！」

お互いに意地になりながら、その日は別れた。

絶対行かない……と瑞希は決めていた。仮に行っただとしても、相葉が来なくて待ちぼうけをしている瑞希を見て、影で笑う相葉の姿が容易に想像できた。

そうだ……絶対に行かない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3648g/>

年下の彼氏

2010年12月24日02時34分発行